1979年4月5日 中国、ソ連引力から脱出　同盟条約廃棄　30年の安全弁失う

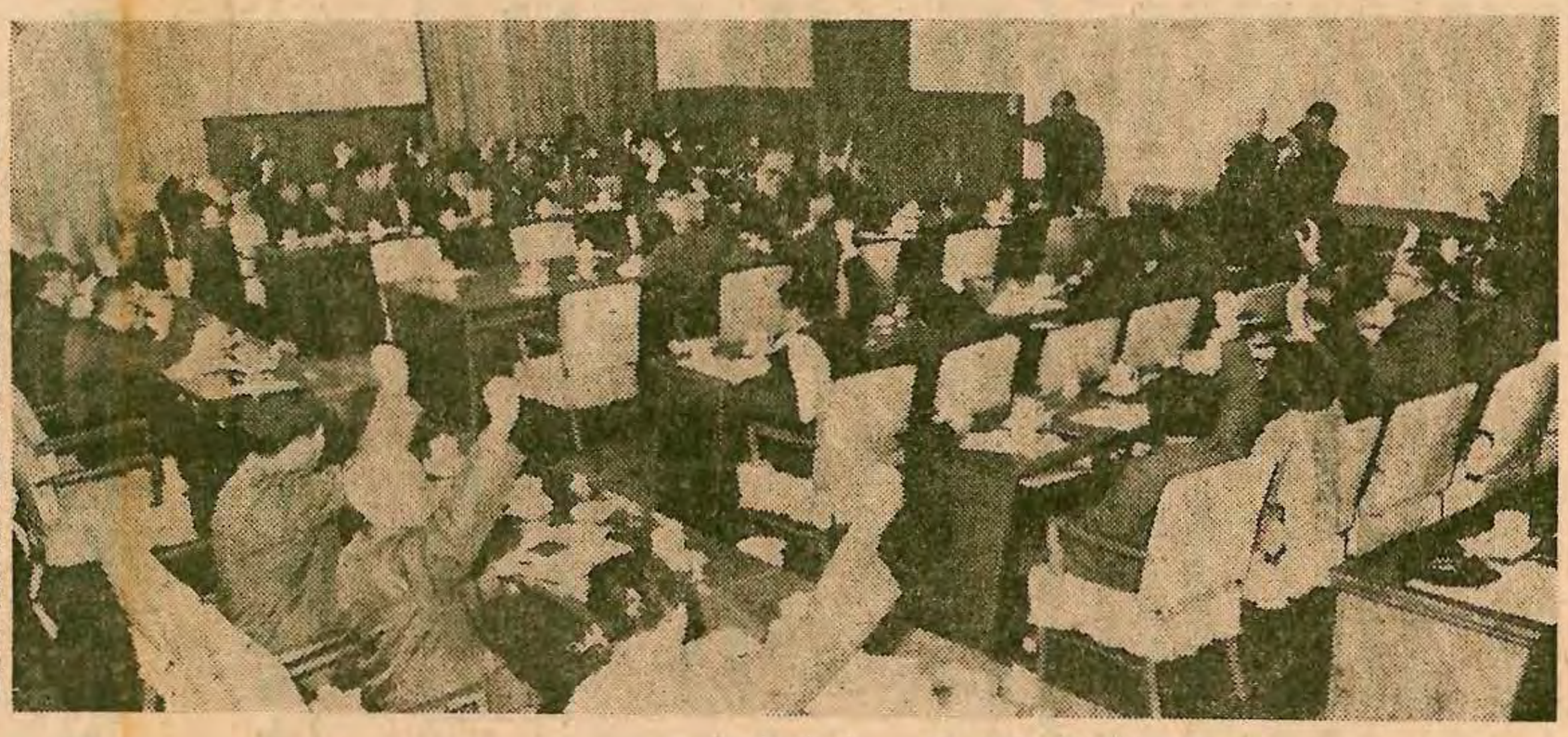
読賣新聞　【月ぎめ購読料(朝夕刊共)2000円】1部売り朝刊60円・夕刊30円　〔第三種郵便物認可〕

中国、ソ連引力から脱出

同盟条約廃棄〝30年の安全弁〟失う

現実遊離の日米敵視

歴史的〝曲がり角〟回った



3日、中ソ友好同盟条約廃棄の決議を満場一致で採択した中国全人代常務委全体会議（中国通信）

【北京三日＝星野特派員】中国は三日、ついにソ連との〝同盟関係〟解消という歴史的選択に踏み切った。これはモスクワへの絶縁状にも等しく、いいかえれば中国がソ連の〝引力圏〟から完全に飛び出したともいえよう。すでに六年も前から北京の指導者は「名存実亡」と条約の存在意義を認めていなかったとはいえ、戦後三十年間にわたり曲がりなりにも両国関係を律してきた最後の安全弁もこれで失われることになる。さらに重大なことは、中国がさる一月、アメリカとの国交を樹立したばかりであることだ。それだけに、続いて行われた今度の対ソ条約廃棄宣言は世界のだれにもわかる形で中国の基本政策を明確にしたもの――と北京では見られている。

三日夜の北京放送は、中ソ条約の延長打ち切りをトップ・ニュースで報じたが、この重大決定もわずか五分間で終わり、改めて同盟解消の意味を国民に説明することもなく、きわめてクールな扱いだった。北京駐在の外国人記者団にも特別の連絡は一切なかった。

だが、中国が一方的に、自ら外国と結んだ条約を期限満了前に廃棄を相手国に通告したのは、建国以来初めてのことである。たしかに中ソ関係の険悪化の一方で、「日本帝国主義の復活」「日本の侵略を防止するため」など日本を仮想敵国とし、アメリカの脅威を視野に入れたこの条約が、今や非現実的かつ大きな矛盾を抱えたものとなり、昨年発効した日中平和友好条約の締結に当たっても大きな障害となっていたのは事実である。

しかし、ソ連との軍事同盟、有事協議の公約をうたったこの条約を解消した後の自国の安全保障、そして社会主義国家関係を展望するに当たって、中国の最高首脳はやはり一つのカケを行い、歴史的な曲がり角を曲がったといえるだろう。

今度の決定に当たって、中国には次の三つの選択が理論的にはあった。

①中国・ベトナム紛争という新たな事態のもとでの五年間の自動延長②条文の中の対日敵視条項を削除する③廃棄の意思通告。

しかし、中国は日中平和友好条約締結の際に、廃棄の方向を明確にしていただけに、日本との約束を守って、しかも中ソ条約を曲がりなりにも継続するためには②の道しか残されていなかった。だが②については改めて中ソ間で交渉の必要があり、現在の両国関係からみて非現実的なものであった。

結局、中国は新たな衝突防止のための交渉開始という提案つきで、条約廃棄の通告の道を選んだわけである。

その点で北京の外交観測筋は、中国外交の重点が今後、日米を含めた国際的な「反ソ統一戦線」形成の方向に置かれるだろうと予測している。近代化を急ぐ中国の悲願とも表裏一体の関係があるだけに、もはや後戻り不可能な選択だったとみるもので、現実の問題として、とりわけ東南アジアでの中ソ角逐が激化し、流動的な情勢になる公算が指摘されている。

中国による今度の一方的通告が日本、中国の離間策を強めることが予測されている。この場合、北方領土問題が未解決である限り、この政策には限界があると中国は見ているようで、逆に中国からの対日友好政策に拍車がかけられることになろう。

中国は薄氷踏む選択

中嶋嶺雄東京外語大教授（国際関係論）の話　中ソ関係を総括してみると、中国は中ソの同盟関係がかなり古い時期からあり得なかったとの認識に立っている。

だが、一方のソ連は同条約を廃棄する意思のないことを表明しており、中国側からの廃棄通告を受けて、ソ連は中ソ間に基本条約がなくなる事態を中国の責任として、今後、むしろ自由な行動をとれるということにも注目すべきで、中国としては、薄氷を踏む思いの選択だったと思う。

中国・ベトナム戦争以来、有利な立場にあるソ連は、この立場を維持するためにも、より慎重に対処することになろう。

それにしても、一つの時代が名実ともに終わった感じが強い。だが、中ソ一枚岩が神話だったように、永遠の中ソ対立というのももう一つの神話だろう。この点を展望しての行動が要求されていると思われる。

来年から非同盟に　香港紙報道

【香港四日＝時事】香港の左派系紙「大公報」は四日の時事論評コラムで、中国が三日、ソ連に対し中ソ同盟条約を延長しないと通告したことを取り上げ、「国際的に（同盟）条約がなくなり、身軽になった。中国は第三世界の国家であり、同時に来年から非同盟国家になる」と述べた。これは、中国が今後、ソ連やアメリカと同盟関係を結ばず、また改めて非同盟国家との連帯を強めていくとの見解を示したと受け取られている。

10日ごろ対中交渉

ベトナム発表　完全撤兵に固執せぬ

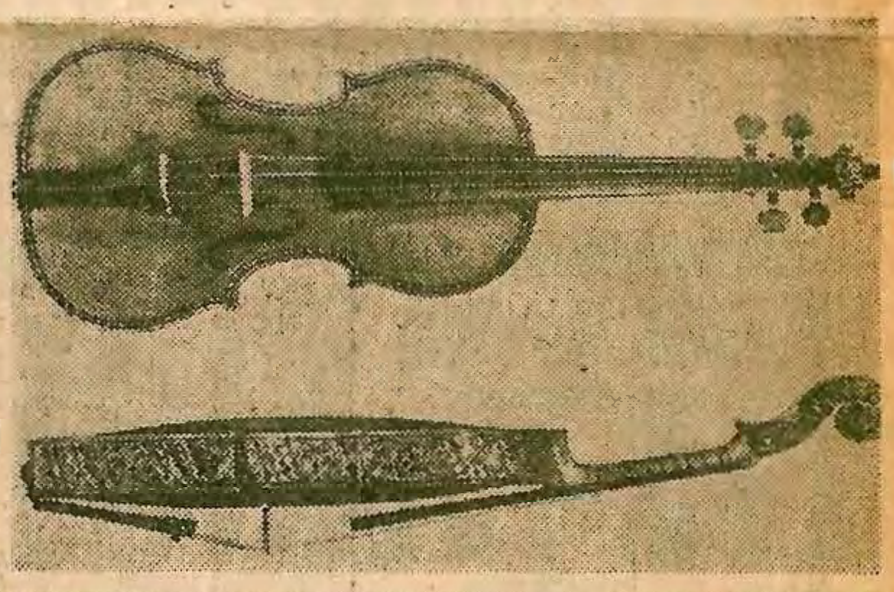
【バンコク四日＝山田特派員】四日のハノイ放送によると、ベトナム外務省は同日、ハノイの中国大使館を通じて、中国外務省に「重要な」覚書を送り、ベトナムが中国側がこれまで主張してきたように、中国軍のベトナム領からの完全撤退を待つことなく、「今月十日ごろから、ハノイで中国側と両国関係に関する問題解決のための外務次官級交渉を開始する用意がある」ことを伝えた。

これについて、ハノイで記者会見したファン・ヒエン外務次官は、「中国側がしなければならないことは、ビザの申請だけである」と述べており、無条件の交渉呼びかけである。

中国側も、この提案に反対する理由はなく、中国、ベトナム両国は、先月十六日の中国側の「完全撤退発表」から約三週間ぶりに、ようやく国境紛争防止を含む関係改善のための交渉に入る見通しとなった。

海外短波

名器の値段は8千万円



このバイオリン、いくらだと思います？　何と四十万ドル（約八千万円）。もちろん、バイオリンの値段としては世界最高。そう、ご存じの名器ストラディバリ。現存七百丁といわれるが、その中でも、象眼細工を施された十丁のうちの一丁。高いのも道理で、愛好家が血眼になって探しているものだが、このほど米ボストンの収集家が、大枚はたいて買い取った。

三百年も前に作られながら、いまだに「楽器として」これだけの値がつけられるとは驚き。そういえば、日本のバイオリニスト辻久子さんも、確か五千万円のやつを一丁持っていましたが、四十万ドルとは、一体どんな音がするのでしょうねえ。（AP）

マーガリンは黄色で

「今後、ピンク色のマーガリンを食べさせられるようなことはない」――オーストラリア政府が四日、こんな声明を発表した。

この国の輸入法には、奇妙な条項があり、これまで輸入品のマーガリンは、すべて〝ピンク〟に着色しなければならなかった。

この条項、国内のバター業者を保護するのが目的で、巧妙に輸入品を〝色分け〟していたわけ。

当然ながら、ピンク色のマーガリンなんて、考えても毒々しく、口にする人はごくまれ。輸入業者からは抗議続出だった。今回の措置は、〝門戸開放〟策を打ち出している同国が、輸入品締め出しの印象を与えないようにと配慮したものらしいが、そこは抜け目のないお国柄、「代わりに二〇％の関税をかける」という。（時事AFP）

イランの暴動再発

【テヘラン三日＝藤本特派員】三日のペルシャ語夕刊紙アヤンデガンによると、イラン北東部の町ゴンバデカブスで続いている少数民族トルクメン族の暴動で、これまでに百三十二人が死亡、三百人以上が負傷した。トルクメン族は、自治権拡大と震地の分配を要求しており、二日夜の政府発表によれば、政府と同族との間で停戦協定が成立したばかりだが、現地からの情報によると、三日も自動小銃や、りゅう弾砲などによる戦闘が続いているという。

互訪問談で合意

領に辞表を提出したと伝えた。

同首相は、これより先、一部で報道された辞任説を否定しているが、二日から三日までのベギン・イスラエル首相のカイロ訪問中、健康上の問題を理由に、一度も公式行事に出席していない。